

もしもベジットの合体が続いていたら

龍帝2号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

究極戦士ベジット。それは悟空とベジータが合体した事で誕生した戦士である。

しかしその存在はポタラの制限時間、ブウの体内に存在する嫌な気によりいとも簡単に溶けてしまう。

もしもベジットがブウの体内に入った際にバリアーを解かなかつたら……。

もしもベジットのつけていたポタラが本当に一生解けない物だったら……。

そんな事で生まれたもしもの話。

目次

もしもベジットの合体が続いていたら	1
超編	
もしもベジット 超ルート ビルス編	6
もしもベジット 復活のF編 1話	22

もしもベジットの合体が続いていたら

「4……5……」

数字を数える声が響く。その数える声はその前に居る者、魔人ブウに対する命のカウントダウンである。それを出来るだけの力をベジットは持って居るのだ。

「6……7……」

命のカウントダウンとは言うものの、彼本人は全く殺す気はない。このまま殺してしまえば吸収された悟飯や悟天、トランクス、ピッコロといった仲間も一緒に殺してしまうからだ。

「8……9……」

皆を救うための案はブウにわざと吸収され内側から助けるといったものだった。飴玉になった際にわざわざブウの頭に付いている尻尾のようなやつを切り落としたのだ。

とはいえベジット自身この作戦が上手くいくか心配している部分もある。

「10！」

その瞬間ベジットの後ろからピンク色の物が覆い被さる。もちろんそれを予測していたベジットはバリアーを張ってブウの体内への侵入を成功する。

ブウは吸収に成功をしたと高笑いをあげているが実のところは失敗をしている。無理もないだろう、一度も失敗をしたことがないのだから。寧ろ自分から吸収されようなんて考えるのはベジットだったからこそと言えるだろう。

そしてここが正しい話との分岐点となる場所。

「ヤツに吸収されずにすんだが……嫌な気が充満してやがるな。念のためにバリアーをとかないでおくか」

そのままベジットはブウの体内の探索を始める。身体は小さくなっていたためか、探すのに時間を用いていたが見つかることに成功

する。

「よし、誰も死んでないみたいだな。さて、見つけたはいいがどうやってこいつらを出すかだな」

そう言いながらベジットはみんな引き剥がしながら考える。その際に魔人ブウを発見する。ベジットが相手をしていたブウではなく、一番最初に見たブウの方である。興味本位で外した瞬間ブウの様子がおかしくなり始める。

その様子に焦ったベジットは皆を担ぎ脱出を急ぐ。

「デブの方はこっちにあるからガリガリの方に戻るのか？」

そうしてベジットは外の光を見つけ、そこから脱出をする。全員の身体は元の大きさに戻ったがベジットを除く他のみんなは気絶しているままであった。

それを確認し皆を岩陰へ隠しブウの様子を見に行く。先程から気が膨れ上がり始めていたからだ。

「ガリガリにはならない……か。気はずいぶん縮んでガキみたくなかったな」

ブウの様子を見たベジットは焦りはなく、余裕そうな雰囲気をもとっていた。確かに気は膨れ上がっているが悟飯を吸収したあの時と比べれば弱く、あのブウすら圧倒していたのだ。それなのに今のブウに負ける事は一切ない。故にベジットには焦る要素はどこにもないのだ。

「別にあれぐらいなら放っておいても……」

「ウギャギャギャオーツ!!!」

唐突に叫ぶ魔人ブウ。あまりの音量にベジットは耳を塞ぎながらブウを見る。動きを静止させ、腕を斜め下へ向ける。そして地球に向けて一発の気弾を放つ。その威力は地球を破壊できるものである。

「ちっー!」

もちろんそれを見逃すベジットではない。素早く気弾を放ち、破壊を目的とした気弾を飲み込みながら宇宙へと消えていく。

「今のきさまには理性がないみたいだな」

それらの行動には迷いはなく、まるでやりたいようにやる子供のよ

うであった。理性という理性はなく、破壊を撒き散らす姿は正しく魔人ブウであった。先ほどまでの言葉を撤回し、ベジットは一瞬でブウへと接近する。

「悪いが直ぐに消滅してもらうぜ、地球を破壊されるわけにはいかな
いからな」

「ギツ!?……ハア~~~~」

一瞬で現れたベジットに驚く様子を見せるが直ぐに邪悪な笑みを浮かべる。面白い相手が現れたとでも思っているのだろうか。そう
だとしても今のベジットには関係のないことだろう。

ベジットは手を伸ばし気を集中させる。

「はっー」

ベジットの手から放たれる不可視の気による攻撃はブウに命中する。命中した部分を綺麗さっぱりと消滅し、ブウが完全に消滅するま
で連続で浴びせ続ける。

「こんなもんか。生まれ変わるのなら良いやつになれよ」

「……終わったか」

長かった魔人ブウとの戦い。それには沢山の犠牲があった。ドラ
ゴンボールがなければどうしようもないほどに。悟空とベジータ、2
人のライバルが手を組み合体しなければならないほど強かったのだ。
その戦いは今この時を持って終わりを告げた。

「とりあえずデンデに会うか」

これからやることへの方針を固めておくべきと考えたベジットは
デンデとサタンのもとへと向かい、これまでの経緯を説明する。

「なるほど、ブウを倒すことが出来たんですね」

「ああ、合体してみれば一瞬だったがな」

「あ、あのー。本当にブウを……」

「心配するな、お前の知ってるデブの方は助けてきた」

ベジットには悟空とベジータの記憶がある。故にサタンによって
ブウが一時的に破壊活動をやめていたことも知っていた。

「ただ、このまま生かしておくには一つ条件がある」

「な、なんでしょう」

「お前がきつちり世話をするというならこのブウは生かしておいてやる。だが、無理なら今ここで消すことになる。どうする?」

「任せて下さい!このミスターサタン、しっかりと面倒をみますとも!」

「それならいい。さて、デンド。これからどうする?」

「そうですね……」

数十分ほど話し合った結果、地球のドラゴンボールより先にナメツク星のドラゴンボールを貸してもらうことに決まった。ベジツトは瞬間移動が使える、悟空の時には新しくなったナメツク星にも行ったのだ。行けないことはないだろう。

何よりナメツク星のドラゴンボールは地球のよりも願いを叶えられる力が強いのだ。貸してもらえれば、の話だが。

ナメツク星のドラゴンボールは思いの外簡単に貸してもらえ、地球を直し、人を蘇らせ、地球に住む人の記憶からブウを消去してもらった。

世界を揺るがしたブウとの戦いはこんな形で幕を閉じることとなる。しかし、ベジツトにはブウよりも恐ろしく手も足も出ない、所謂弱点という存在がいた。

「う、うわあー!」

元々、ベジツトは悟空とベジータが合体して生まれた存在である。そして悟空とベジータは既婚者であり、息子も存在していた。故にこうなることも予想出来ていたのではないだろうか。

「悟空さー!」

「ベジーター!」

2人の妻に説明を求められることを。

「魔人ブウを倒すにはこれしかなかったんだ!」

どうしてこうなってしまったのか詳しく説明している中でベジツトは1つ思ったことがあった。

(合体してオレはここまで強くなった。だが、これからオレを本気にさせる相手はいるのか?)

悟空とベジータ、最強のライバルが合体して生まれた存在は圧倒的な力を持ち並大抵の力の持ち主では相手にならない。しかし心配することはない。なぜなら、ベジットはまだ知らぬ、または知っている強き存在がいることを。

それは1つの世界線。

宇宙の破壊と創造を調律する破壊側の絶対なる存在、破壊神。

世界を絶望に叩き落とした復活し、黄金に輝く恐怖の帝王。

愚かな存在を排除し、綺麗な世界に変えようとする絶対なる神。

宇宙の存亡を賭けた常に全力全開、問答無用の宇宙サバイバル。

これはまた別の世界線。

サイヤ人に恨みを持しツフル人の手により作られた復讐の兵器。

地獄と現世に存在せし人造人間が合体した究極の人造人間。

自ら願いによって生み出されたマイナスエネルギーの邪悪龍。

きつとそれはベジットを退屈させることのないものへとなるだろうさらにベジットを強くするだろう。

もしもで始まったIF世界は、闘いの話はまだ終わらない。

超編

もしもベジット 超ルート ビルス編

「ビルス様、そろそろお時間ですよ」

「ん？ もうそんな時期かい？」

「ええ、今日が丁度、予言の日です」

第七宇宙の破壊神ビルス、そのお方はとある星へ向けて出発をしようとしていた。それは予言魚にとある存在が現れると言われたからだ。さらにビルス自身も予知夢で見ているのだ。

「ですが本当にそんな存在が現れると思いますか？」

「予言魚に言われてるし、予知夢でも見た。といっても僕もそこは半信半疑なんだ」

「そうですねえ、まさか……」

予言された存在、それは普通であるならば有り得ない存在である。そんな存在が生まれても問題ないのかと言われても良い程に。いや、だからこそ予言されたのかもしれない。

「好敵手^{ライバル}が現れるなんて。それもサイヤ人だろ？」

「そうですね。フリーザによってほぼ死んだみたいですが数人生き残りがあった。珍しい非戦闘タイプというのも含めたら3人ですね」

「ふーん。で、そのどっちがフリーザを倒したんだっけ？」

「孫悟空というサイヤ人です」

「もう1人は？」

「ベジータです。こちらの方はご存知かと」

「あー、ベジータ王の息子か。そいつらは今どこで何してんの？」

「もういないみたいですよ」

「はあっ!? 死んだのか？ それなら行く意味ないじゃん！」

元々ビルスは地球に住むサイヤ人に超サイヤ人ゴッドとという存在を聞くために向かう予定だったのだ。その2人が居なくなったというならばもはや行く必要はない。ただしそれは居なくなった理由が死んでいたという場合だが。

「いえ、死んではいません。正確に言うとお二人は界王神のポタラを使つて合体したご様子です」

「ん？ポタラによる合体は1時間の制限が今はあるんじゃないやなかったのか？」

「どうやら彼らが使ったポタラの持ち主が15代前の界王神。つまりビルス様が気に食わないから封印なされた界王神のものだったようです」

「あいつのか！なんだ封印が解けてたのか。ならポタラの合体が解けないのは仕方ないか。まだあの事件が無かったからな」

「それでいかがなさいますか、ビルス様」

「とりあえずその2人が合体したとは言えまだ生きているんだろ？」

「そいつらのところに行つて聞くしかないだろ」

「では行きましょうか」

そうしてビルスら二柱は移動を開始し、瞬く間に消えていった。

舞台は地球。

話の中心であるベジットはというと……。

「それにしても兄さんが孫悟空という人と合体したなんて。何度見ても信じられないです」

「確かに合体するまでプライドが許さなかったがな。昔のオレにベジータ言つても信じることはないだろうな」

「ははっ、そうですね。そういえば今日は招待してくれてありがとうございます
ございます」

「そうかしこまる必要はないさ。今日はブルマの誕生日パーティーなんだからな」

そう、ベジットの片割れであるベジータの妻、ブルマの誕生日パーティーに参加していたのだった。ベジットの話し相手をしていたの

がベジータの弟であるターブル。サイヤ人にしては珍しい非戦闘タイプであり、悪の心を持っていないサイヤ人なのだ。

彼はある存在に追われて妻と一緒に助けを求め、地球へやってきたのだ。そのとある存在は今では大した敵ではなかった。いとも簡単に倒し、当時やっていたパーティーに参加するぐらいには改心していた。

それはさておき、ターブルが参加している理由は単純に断る理由がなく、参加する理由は沢山あるからである。兄の妻の誕生日パーティーに招待されるなど、いくら丸くなっていたとしても昔からしたら信じられないようなことであり、嬉しいことでもあったからだ。

「それじゃパーティーに戻りますね」

「そうか」

ターブルに向けていた視線を外し、空を見上げる。

ベジットは退屈な日々を過ごしている。修行はしているし、美味しい飯も食べている。ブウと闘った時と比べると確かに強くなった。だが、その力を存分に発揮する事が出来る相手がないのだ。互いに高め合う存在は合体した事で居なくなつたからだ。

彼の相手を出来る者は殆どいないだろう。しかしこれは傲慢ではない。唯でさえ強かつた戦士の2人が合体したが故の圧倒的な実力と戦闘のセンス。それは今までの強敵が束になつても叶わない。それがベジットを退屈にさせる原因であった。

「いたいた、ターブルの言つてたとおりね。もう、探したじゃない」

3人で話し合った際、呼び方をどうするのかという事になつた。だが、彼女らにとつて合体したとしても彼^{彼ら}への愛は一切変わらず、孫悟空は孫悟空、ベジータはベジータという事で決まったのだつた。

「少し考え事をしていただけだ。別にここからは離れたりはしない」

「わかつてるけど……。はあ、まあいいわ。次のイベントに移るから来てちょうだい」

「ああ」

皆のいる所へ戻っている最中、ブルマは口を開く。ベジットの考え
ている事がわかつていたからだ。

「どうせ強い奴がいない事を悩んでたんでしょ？」

「……まあな」

「やつぱり。そんな事考えててもまた強い奴がでてくるわよ。今までだってそうじゃない。セルとかブウとか。だから心配しなくても大丈夫よ」

ブルマにそう言われてベジットも気がつく。世の中には強い奴がゴロゴロいる事を。孫悟空の師匠、亀仙人も言っていたではないか。世の中、上には上がいると。そう考えるとベジットの悩みはまるで存在してなかったかのように霧散していった。

「すまねえなブルマ。誕生日なのに気を利かせちまって」

「いいのいいの。夫を支えるのは妻の役目だからね」

「じゃあ皆！ そろそろ次のイベントに移るわよー！」

『イエーイー！』

飲み食いしながら段々と盛り上がっていくブルマの誕生日パーティー。楽しそうに美味しいものを食べながら参加するベジットだったが空気が少し変わった事に気づく。

(なんだ?)

それは辛うじて気付けたものであり、具体的なものは一切わからな。寧ろ気付けたことの方がすごいだろう。この中に居る戦士の中でベジットだけが気付けたのだから。

「ふーん、ぼくたちに来た事に気付けるぐらいには強いんだね」

「なっ！」

空気が変わった事には気付いていた。だが後ろに誰かが立っている事には気付かなかったのだ。

振り向いた先にいたのはどこか記憶に引つかかる姿だった。

「その様子だと思いい出せてないみたいだね。まあ、合体したことで記

憶があやふやになっちゃったのかな。ぼくは破壊神ビルス、流石にここまで言えばわかるかな」

「破壊神……ビルス……。まさか!」

ベジータの記憶に存在している破壊神ビルス。それはまだ小さい頃の話ではあったが、その時にはその者が途轍もない存在だという事を本能的に理解していた。

「それで、なぜビルス様はここへ来たんだ?」

「超サイヤ人ゴッドを探しに来たのさ。だから生き残ってる君に聞きに来たんだ。それで知ってる?」

「超サイヤ人ゴッドだと? ……聞いたことがないな。ターブルにも聞いてみるか」

「ベジータの弟か。僕の気が変わらないうちに頼むよ」

「おい! ターブル、少し聞きたいことがあるがいいか?」

「はい、なんでしょうか兄さん」

ベジットの声に反応してこちらへ向かって来るターブルだったが、ビルスの存在が目に入りその顔が恐怖へと歪んでいく。

ターブルにはビルスがどういう存在がしつかりと記憶されていたようだった。

「ビルス様、ど、どうしてこちらに?」

「超サイヤ人ゴッドって奴が僕のライバルになるみたいだね。それでその存在を調べにきたんだ」

「悪いがオレの記憶には超サイヤ人ゴッドは聞いたことがなくてな。お前なら知ってるんじゃないかと思つてな」

説明を受けたターブルは納得の色を示し顎に手を添える。心当たりでもあるのか少し悩んだ顔付きへと変わる。

「超サイヤ人ゴッドという名は聞いたことがあります。かなり昔の話だったので確証はありませんが、大丈夫ですか?」

「ぼくは闘うことさえ出来れば気にしないよ」

「とりあえず話してくれ」

ターブルから話されたものはベジットの記憶には全く無いものだった。

正しい心を持った6人の古のサイヤ人。その中から生まれでた超サイヤ人ゴッドだったが何かがあったのか忽然と消えてしまう。詳細は不明だったが超サイヤ人ゴッドは確かに存在していたという事は明らかになった。

「でもこれだけじゃどこにいるのかわかりせんねえ」

「……………少し時間をくれ」

ベジットはブルマの方へと歩き出す。何か策でもあるのか一瞬の迷いもなく進んで行く。

「ブルマ、ちよつといいか」

「どうかした？」

「ドラゴンボールを使わせてくれないか？」

瞬間、ブルマの顔つきが真面目なものへと変わる。ベジットの纏っている空気と発言の内容。それがただならぬものと理解したのだろう。

「何かあったのね。理由は？」

ベジットはこれまでにあつたかを話す。ビルスが現れたこと。ビルスの素性。超サイヤ人ゴッドという存在を求めてここへとやってきたこと。そして超サイヤ人ゴッドの詳しい情報を知るために利用すること。

「……………はあ、しようがないわね。使いなさい」

「いいのかわ？」

「景品は別の変えればいいしね。それとこのパーティを滅茶苦茶にされたくないもの」

ブルマによつて取り出されたドラゴンボールを使い神龍を呼び出す。語られる超サイヤ人ゴッドの歴史。超サイヤ人ゴッドは自力で慣れる事はなく、力を注ぎ込まれることによつて作られる力である。しかし現実はその簡単にはいかなかった。

「サイヤ人が足りない、か」

そう、今この場にいるサイヤ人は5人だ。ベジット、孫悟飯、孫悟天、トランクス、ターブル。元々は2人だったベジットだが合体している以上はどうしようもないのだ。いけるかもしれないと一度は試

したもののベジットのパワーアップだけで終わり、何もなかったのだ。

「まって、実は」

上がった声はビーデルのもの。その声には意を決したといえるようなものを含まれていた。内容はお腹の中に新しい命が存在するということだった。

この状況では仕方のないことだろう。本来ならばもつと2人っきりの所で、ムードのあるタイミングでやりたかったのだろう。しかし彼女は優しい。彼らが困っているのを見過ごすような事はしたくなかったのだろう。

「それじゃ、やるぞ」

円を作るように手を繋ぎ、ベジットへと力を託していく。その際に何故だを感じる過去の記憶。それはこのままではいけないと感じた6人の正義の想いと共に闘ったもの。それはぼんやりとしていくに忘れてしまいそうなものだった。そして青い光が彼らを包み始める。

先ほどまでとは全く違う状況にビルスを除いた皆んなが注目する。

青い光の筋がベジットへと吸収される。それと同時にベジットはふわりと浮き始め途中で静止する。やがて青い光はベジットを覆い隠す。まるで神の誕生を見てはいけぬというような。覆った光は丸い球体へと変わり数度ほど、脈を打つように波紋を放つ。全ての行程は終わったと言わんばかりに球体になった光は内側から溶け出すように形を崩していく。

中から出てきたベジットの姿は大きくは変わっていないものの、髪の色は赤く染まり、いつもより少し細い体つきになっていた。

「全然強そうになったとは思えないんだけど、これで大丈夫なのよね？」

「はい、問題ありません。確実に成功したといえるでしょう」

既にビルスはベジットの方を見ており、ベジットも同じくビルスを見ていた。

「どこからでも」

少しの間。それはベジットが隙を窺っている時間だが、隙などは一切無い。そこは流石破壊神といっても差し支えないだろう。

このままでは戦況が動く事は一切ない。ならば自ら動くしか方法はないだろう。

聞こえる風切り音と衝撃音、それはベジットが超高速でビルスの前は移動したものと、突き出した拳を受け止めた時に発生したものだ。その手を離れた瞬間に距離を取るベジット。

「これが神の次元が」

「一切の偽りなく超サイヤ人ゴツドの力と言えるだろうね」

同時に空へと上がっていく2人。このまま地上で闘えばクレターだらけのボコボコの土地になるだろう。ビルス自身は別にどうでも良いのだが、ベジットはあのまま続けていけばパーティの続きを出来なくなりブルマに怒られるかもしれないと想像したからだ。神になったとしても怖いものは怖い。それが現実である。

「改めていかせてもらうぜ、ビルス様」

途轍もない速度で背後を取って蹴りを叩き込もうとするベジットだが、その速度を軽々と視界に収めていたビルスは振り返る事なく脚を受け止める。ベジットに次の行動させる間も無く掴んだ脚を水平に投げ飛ばす。

「ぐっ」

投げた速度以上の速さで追いついてくるビルスを察知し、身体が回転している勢いを利用してそのまま蹴りあげようとする。が、難なくビルスは体を捻り、回避を行ってベジットへ追撃の拳を腹部へ叩き込む。

「カハッ」

そのまま吹き飛ばされるそうになるが、後ろに軽くずらされる程度には耐える。ベジットはその一撃の重みを確かめるように腹部に手を置く。一息をつくように一度呼吸を繰り返す。

腹部に置いた手を戻し、ビルスとの距離を詰める。しかし、ベジットがそれからの行動するよりも先にビルスは蹴りを放つ。それを避

け、後ろ側へと回り込む。

「見えてるよ」

そう言い、身体を捻ってそのまま回し蹴りへと移行して背後にいるベジツトへ攻撃を仕掛ける。ベジツトの移動速度はまだ遅く、ビルスは一切見逃していない。故に回し蹴りが空気を裂くだけで終わる事を予想していなかった。

「なに!？」

流石のビルスも驚きの感情を表は出してしまう。ベジツトが背後から移動した気配を感じ取れなかったからだ。これまでにない速度。決して油断していたわけではないのだ。

「はあぁッー」

声の響く方向へ向くよりも先に、ビルスは頭部へ衝撃を喰らう。その衝撃は受け止めきれず、そのまま地面へ叩きつけられる。叩きつけた場所は森林の中。生物がいるような場所に落とすわけがないの言うまでもない。

それを追うように地上へと降りるベジツト。先ほどの攻撃に全く答えてない様子のビルス。そのお互いの顔には笑みが浮かんでいた。「ようやくこの力にも慣れてきたかな。想像以上の力だけ、神の力つてやつはよ」

「ぼくも想像以上だよ、ここまでやるなんてね。いつぶりかな、ここまです鋭い一撃をぼくに与えたのは」

その浮かんでいた笑みというのはこの闘いへの高揚感から生まれるものであった。それもそうだろう。お互いにここまで闘える相手がいなかったからだ。ビルスにはウイスという師匠はいるがそれはまた別のことなのだ。

同時に距離を詰め合い、拳と拳がぶつかり合う。生まれる衝撃波付近にある木々を根から吹き飛ばし、遠くにあつた木すら横転する程。上空にあつた雲は全て吹き飛んでいた。まるで隕石でも落ちてきたかのようなクレーターが生まれる。

その中心で固まっていた2人だが先にビルスが手足を使った素早く鋭い乱撃。それをベジツトは最低限動きで避け、手で弾き、受け止

める。ビルスの右手と左手を掴みそのまま反撃へと移る。右脚を使つて蹴り上げるがビルスはそこにはいない。掴まれた手を利用して逆立ちをする要領で回避をしたのだ。

体勢を元に戻す勢いでベジットのアゴへと膝蹴りが直撃する。

「ぐっ！っらあー！」

その強さに仰け反りつつもすぐさま脚を掴み地面へと叩きつける。その衝撃で跳ねたビルスの脇腹へ横蹴りを放ち、防がれることなく直撃する。

大地を削りながら吹き飛ばされるビルスに一瞬で追いつき拳を振り下ろすもそこには誰もいない。ただ地面を殴っただけである。

避けられたと認識する前に背中への衝撃。瞬く間にクレーターが小さくなつていく。いや、違う。ベジットがビルスによって吹き飛ばされ、地面から高速で空へと吹き飛ばされたからそう見えただけである。

「まだ速くなるか」

「まあね」

空中で体勢を立て直しこぼす様に呟く。もう背後を取られていることに気付いていたからだ。

「そろそろ本気を出してもいいんじゃないかい？ 君も」

「ならビルス様も本気になってくれるのか？」

「それは君次第さ」

お互いが不敵に笑う。そしてさらに上へと移動する。

止まった場所は宇宙空間。2人の本気をぶつけ合えば地球とてただのクレーターでは済まないからこそ自由に広々と闘える場所を選んだ。それだけの事であり、それほどまでに強いのだ。

「さて、いくぜ」

瞬間、その場には数百にも及ぶ衝撃音。

先程までとはまるで違う速さ。この宇宙で2人の動きを捉えられるものはウイスを除いて誰1人として存在しない。

一瞬の攻防の中でベジットから赤い色が失われる。超サイヤ人ゴッドの力が失われたのだ。だが戦いは終わらない。戦いの終わり

の合図はどちらかが降参するか倒れた時なのだから。

そして何よりもビルスはベジットから力の減少を感じなかったのだ。ならば戦い続ける他はないだろう。

一際大きな衝撃音とともに2人の速度はゼロとなる。前腕をぶつけ合ったままお互いを押し切ろうと力を込める。2人がぶつけ合っている力は増大し、宇宙を震わせる。

拮抗していた2人だったが、ベジットが一瞬力を緩めてビルスの態勢を崩そうとする。しかし、ビルスはそれ読んでいたのか、込めていた力の向きを変えてそのまま身体を縦に回転させる。

それに驚き距離を取ろうとするが、遅い。回転した勢いを乗せたビルスのかかと落としがベジットの肩へ刺さる。だが、ベジットはそれと同時に掌に気を集めビルスの胸元で爆発させていた。

互いの攻撃をモロに喰らい吹き飛ばされていく。吹き飛ばされながら体勢を直す。そして空間を突き破るかのようにビルスの方へ向かっていく。それはベジットだけではなくビルスも同様。拳に力を込めながら。

「はあああああああああ!!!」

「うおおおおおおお!!!」

互いのほぼ全力といっても差し支えないほどの一撃。それがぶつかり合う――

「そこまでです」

――事はなかった。

交差する刹那、ウイスが2人の間に現れて受け止めたからだ。

「それ以上おやりになると周りの惑星まで破壊してしまいます。たしかに、太陽系から離れて闘っているのは良いのですがねえ。流星にその一撃はシャレになりません。ただでさえお2人が戦った後がこんなになっているのですよ?」

ウイスが視線を向けた方を見るとたくさんの惑星にヒビが入っていた。もし今の一撃がぶつかり、周囲は衝撃が走ってしまったら確実にとどめを刺していたことになるだろう。

それを見たビルスがため息をつく。

「ボクとした事がはしやぎすぎたみたいだ」

「これで終わりみてえだな」

「破壊神として破壊するのは問題ないけど、ただの闘いの余波で破壊するのは問題だからね」

「ならこの勝負は引き分けつてところかビルス様？」

ビルスは少し考えるそぶりを見せ、笑う。

「今回はそれでいいか」

「ではこれからどうしますか？ビルス様」

「うーん、あ！　そういえば地球で何かやってたよね」

「ああ、ブルマの誕生日パーティーのことか。それが何かあったか？」

ビルスはワクワクした様子でベジットに尋ねる。その様子に少し驚きを隠せないベジットだった。

「いや、あそこにいた時美味しそうな匂いがしてね。何よりウイスが今もこっさり美味そうに食べているのが我慢ならないんだ」

「あららバレていましたか」

「ボクの目は誤魔化せないぞ」

ビルスの言っている通りに先程からパフェを片手に美味しそうに食べていたのだ。その姿はベジットにも見えていたし、コソコソしている時点で何かをしているの明らかであった。

「暴れないと約束してくれるなら別に問題ない」

「なら早速食べにいくとしようかウイス！」

「はい」

「そういえば超サイヤ人ゴッドの力がなくなっている状態でボクと闘えていた事に気付いていたかい？」

「ん、そうだったのか？」

「やっぱり気付いてなかったみたいだね。殆ど変わらずボクと闘えていたなんて、稀に見る天才と言ってもいい。それも全ての宇宙から見

ても君ほどの才能を持つてる奴はいないかもね」

「ほう、それならいつかビルス様を超えられるかもな」

「あまり調子に乗ってるよ破壊しちゃうよ」

会話しながら食べている姿を見ているウイスは嬉しそうな笑みを浮かべる。たしかにビルスとして本気を出したのは久しぶりに見たのだ。そしてあれ程の才を持つのなら破壊神としてのビルスとも良い感じに闘えるかもしれない。そう思ったのだ。

「最近ビルス様がつまらなさそうでしたからねえ」

そう、ビルスは強い奴と闘うのが好きなのだ。だが強くなりすぎたが故に楽しんで闘うことがなくなってしまった。そんな時予知夢に超サイヤ人ゴッドなどというものが現れ、半信半疑のままここに来たのだ。それが本当に実在し、楽しそうに闘っていたのだ。

「それに……」

ウイスは視線を横にずらし、ブルマとチチを視界に写す。

「退屈していたのはビルス様だけではなかったみたいですね」

その2人はベジットの楽しそうな姿を見て安心していたのだ。

「あー！ わさびをそのままは——」

寿司を食べていたベジットとビルス。その中でビルスがわさびについて聞いていたのだが、そのままでも美味しいと勘違いをしてわさびだけで口に入れてしまったのだ。

「え？ ——っ？？」

瞬間、鼻を真っ赤にしたビルスが真上へと飛んでいく。近くで見ていたウイスがすぐさま反応する。

「いけません！」

ビルスの首に手刀を落とす。それだけでビルスの勢いは急激に収まり、落下していく。その途中でビルスは落ちかけた意識を覚醒させ地面へ軽やかに着地する。

「このわさびびってやつは恐ろしいね」

「それは寿司と一緒に食うもんだ。慣れないうちは少量を醤油に溶かして食べたりするんだ。間違ってもわさびだけで食うもんじゃない」

ベジットは少し呆れつつわさびの補足説明をする。それなら早く説明しろと怒るビルスだったが、言われた通りの食べた方をするすとすぐに手のひらを返したかのようにわさびをほめていた。

「にしても驚いたぜ。あのウイスって奴があんなに強いなんてよ」

「ボクの付き人だけど師匠でもあるからね。実質この宇宙で1番強いのは……」

「オレも修行をつけてもらうってのもありかもな」

「それも有りだと思うけどね。もちろんタダでってわけにはいかないよ。」

「それなら地球の美味しいものを持って来てやるよ」

「ウイスならそれで修行をつけそうだ」

ビルスの脳内に浮かぶのはベジットの持つて来たものうまさに一瞬でOKをだすウイスの姿だった。

現に今日のパーティーでやっている屋台の食べ物を8割方回っていた。更に帰ってからも楽しもうとしているのか、各屋台から包装してもらったものを謎の空間へ収納していた。

「アレなら一瞬だな」

「……地球ほど食べ物のレベルが高い星もないからな。それとあくまでもこの宇宙ではウイスが1番強いだけで、他の宇宙も含めたらわからないという事は覚えておけよ」

「他にたくさん宇宙があるのか？」

「全部で12個の宇宙がある。それぞれを第1宇宙から第12宇宙といった風に数字で分けられている。この宇宙は第7宇宙」

「なるほど、他の宇宙にもたくさん強い奴がゴロゴロしている可能性があるわけか」

「ワクワクするしてくるだろう？ それぞれの宇宙に破壊神もいるし付き人もいる」

ベジットはまだ見ぬ強敵にワクワクを隠せなかった。それだけ多ければビルスと同等、もしくはそれ以上の実力を持った者がいるかもしれないだ。サイヤ人

の血が強いから仕方ないのだろう。

「そして足して13になるように宇宙は隣接していてね、ここは第7宇宙だから」

「隣は第6宇宙ってことか」

「ま、これはどうでもいい事なんだけど第6宇宙の破壊神はボクの兄弟でもあるんだ。付き人もウイスの姉だし」

「そんな事があるもんなんだな」

「普通はないよ」

「さてそろそろ帰るか」

「今度闘う時はオレが勝つぜ」

「フン、ボクの本当の実力と闘えるようになってから言うんだね。おい、ウイスー！」

声をかけられたウイスはビルスの横へ一瞬で現れる。手に持っているものは帰ってからすぐ食べる用の物のようだ。

「はい、ビルス様」

「帰るぞ」

「畏まりました」

「さらばだ」

ウイスの後ろへと移動する。そしてウイスが杖を使い、その場から一瞬で消える。それを見送る一同だったが、しばらくしてまた楽しいような空気へと変わる。

「久々にワクワクして来たぜ。まだまだオレも強く慣れそうだ」

自分を超える者は最早いないと考えていたが、間違っていたと考えを改めるベジット。もしかしたらこの宇宙にも強い奴がいるのかもしれないと。

「さあて、パーティーが終わったら修行すつかな……ん？」

ベジットは不意に何かを忘れていたような気がした。何か大切なことのような気がするそれを。何なのか考えを張り巡らせるがいまいちピンとこない。

ならばさつき言った言葉が引つかかったのか。もう一度確認をしようとして反復した。

「パーティーが、終わったら、『修行』すつかな。……………修行、かなるほど」

ベジットは額に手を置き、自分うつかりさに呆れる。ウイスに修行をつけてもらう予定だったのに彼らの住んでいる場所を知らないのだ。もう近くにビルス達の気は感じ取る事ができない。

「まあ何とかなるか」

いざという時は界王神にでも聞けばわかるだろうと適当にあたりをつけパーティーへ戻っていく。

ベジットの物語はまだまだ続く。

もしもベジツト 復活のF編 1話

「ここまでです」

その一言と同時にベジツトは張っていた気を緩めて地面へ降り立つ。

「ふう、全く当たりやしねえや」

「まだまだスピードが足りませんからねえ」

ベジツトは今、ビルスの住んでいる星へ来ていた。もちろん遊びに来ているわけではなくウイスに修業をつけてもらいに来ているのだ。勿論、地球産の美味しいものを持ってきた上でだが。

流石にビルスの師匠なだけあり、先程の修業も一撃どころか擦りすらしなかった。それだけでベジツトはウイスとの間に途轍もなく大きい壁が隔てているのを理解する。

「確かにベジツトさんの闘い方はある程度洗練されています。ですが、その洗練された動きは考えるという過程があつてのもの。これを駄目とは言いません。ただ、その闘い方が出来るのは自分よりそれなり強い相手まででしょう」

「つまり、頭で考えて闘うより身体が勝手に反応させて闘う方がいいってことか？」

「はい。それが出来るようになればどんな危機も回避できますし、自分より格段に強い相手とも闘う事が出来るでしょう。初見殺しと言われるような技も、回避不可能と思われる状況も無傷で切り抜かれるかもしれません」

「かもって何かあるのか？」

「それ以上は極めた後の経験次第でしょうねえ。まあ、私ほどになればある程度は完璧と言えるでしょう」

「なるほどな」

思い返してみればウイスが幾度か花びらに気を取られていたり、目を瞑って微笑みながら避けていたりと簡単には出来ないことを軽々しくやっていたこと思い出していた。

ベジツトからすればそんな風に闘えるなど考えられなかった。

実力差が大きいからやられていると考えれば簡単かもしれないが、そこまで単純な話ではないだろう。

「まあ、これに関しては一朝一夕で身につけられるものではありません。ビルス様もまだ未完成ですから。時間をかけて教えるものの1つです」

「ほう、ビルス様でもまだなのか。他の宇宙にその闘い方を極めている奴はいるのか？」

「まだ居ませんね。もしかしたら表に出てないだけでいるという可能性も否定は出来ませんが」

「いるのなら闘ってみたいもんだ」

少しの休憩を挟み、また修業を再開する。この流れを暫く続ける。ただ、ウイスには確信があった。この修業がいつになるかはわからないが、実を結ぶと言うことを。ビルスが先か、ベジットが先か。どちらが先にしてもお互いにいい刺激になり、これまで以上の修業成果が出る可能性に胸躍らせているウイスは思わず笑みを浮かべる。

(実力差はありますが、ベジットさんがいるというのはいい傾向になりそうですね。後はビルス様がどうなさるにかかっていますが、まあそれは大丈夫でしょう)

その笑みにベジットは挑発と受け取り、修業の激しさは増している。

「にしてもだいたい気を上手く使えるようになって来たな」

「そちらに関しても殆ど言うことはありませんね」

もう少し手荒くやる必要があるかと思っていたウイスだったが杞憂に終わった事に感心していた。神の気というのは普通の生物が利用している気と比べてクリアで繊細な気なのだ。そう簡単に扱えるものではないのだが、そこまで苦労せずに修得していたベジットだった。

「しっかりと神の気をコントロールしているので、今のベジットさんには神の気がメインで流れていますよ」

「超サイヤ人ゴッドのパワーを持ったサイヤ人ってところか、今の才

レは」

「有り体に言えばその通りですが、全くサイヤ人というのはややこしいものですねぇ」

超サイヤ人ゴッドの神の気を直接体内に取り込んでいるために通常よりは疲れるものの、ベジットはこの状態に新たなる可能性を見出していた。己が更に強くなるための形を臆げながらが見えていた。

「あら、ベジットさんには何か考えがあるみたいですね」

「やってないが試してみる価値はありそうなだけさ。まだ形には出来そうに無いがな」

「ならそれも交えての修業も始めるとしましょうか」

「おし、行くぜ！」

そうして、また修業が始まる。

「綺麗に完全復活ができたみたいですね、よくやりました」

「いえ、ドラゴンボールが3つも願いを叶えることができたので。それでフリーザ様、最後の願いは如何いたしますか？」

地球では神龍が呼び出され、最悪の願いが叶えられていた。バラバラになって殺されていたフリーザだったが1つ目の願いにより復活し、2つ目の願いで身体を修復してもらっていた。

「ゴルド大王様を……」

「いえ、それでしたら私が1つ」

「は、はい。どうぞ」

復活したフリーザは神龍の前に立ち、不敵な笑みを浮かべて一言。「セルさんをこの場に復活させてください」

「……いいだろう」

その願いを承諾した神龍は眼を赤く光らせる。そしてフリーザの横にはセルが蘇って立っていた。少し困惑した顔をするがフリーザ

と神龍の存在を認知すると何があったのか理解をする。

「私を蘇らせるとはな」

「なに、非常に苛立たしいことですが孫悟空を殺すには修業相手が必要ですからねえ」

「それで私と言うことか」

セルとフリーザ。その2人は生きていた頃は接点のかけらもないのだが、地獄で知り合っていたのだ。偶然か必然か、2人は仲良くない。そして共通点があった。孫悟空という存在を倒すことに他ならない。まあ、死んでいる身である上に孫悟空が地獄までやって来るということもない為、強くなろうともしなかったが。

しかし、今は数奇な運命によりこの地球で再び蘇った。ならば今のまま戦うわけにはいかないだろう。

「さて、行きますよ」

「いいだろう」

そうして最悪の願いを叶えられた神龍はドラゴンボールへと戻り、散り散りになって飛んでいく。それを背にフリーザとセルは部下達を連れて地球を去る。

それは新たな地球の脅威になり得る存在が誕生しようとしている証拠だった。